

カメルーン牧畜民「ボロロ」のエスニック・アイデンティティ

平成 20 年入学

参加したフィールドスクール：カメルーン・フィールドスクール

早坂 麗子

キーワード：生業実践、定住、イスラーム、民族性、フルベ

自身の研究テーマについて

本研究が対象とする「ボロロ」とは、西アフリカ帯に広く分散して暮らす牧畜民フルベの一派に対して用いられる呼称である。「ボロロ」の成立は、フルベが 18～19 世紀にイスラーム教を奉じて聖戦を起こした頃に遡る。聖戦にともなって定住を進めたフルベに対し、遊牧生活を維持しイスラーム化が進行していない人々を揶揄して用いられた呼称、これが「ボロロ」である[嶋田 2008]。つまり「ボロロ」とは他称であり、侮蔑的な意味合いを含んでいる。しかし 1990 年代以降のカメルーンにおいて、自らを「ボロロ」と呼び、その権利を主張する者がでてくる[Pelican 2009]。彼らは組織を結成して、地位向上のための運動を展開し、国際的にもその存在を認知されるようになった。こうした動きの中で「ボロロ」という名称は肯定的なイメージを含むようになる。

こうした経緯を見ていくと、「ボロロ」のエスニック・アイデンティティとは、それぞれの社会的状況の中で形成され、変化しているものだということがわかる。本研究はその「ボロロ」アイデンティティの形成と変化を、生業実践の検証を通して明らかにしようとするものである。

現地調査は北部カメルーンにおいて行っている。定住生活を営む人々を対象に、2008 年から生業実践の参与観察、定住前後での生活の変化について聞き込み調査を続けている。特に「定住化」という出来事を軸に、いかに定住が可能となったか、また定住前後での彼らが自身の生活感情はどう変化したのかを明らかにし、上記の議論につなげることを試みている。

フィールドスクールから得られた知見について

フィールドスクールでは、東部州アンドン村を訪れたことが印象に残っている。アンドン村ではキャッサバの栽培が盛んだが、現在そのさらなる収量増加を目指したプロジェクトが行われている。また、この村の特徴として村内に森林地帯とサバンナ地帯とが存在することがあげられる。森林地帯には畑が集中し、サバンナ地帯には、私が研究の対象とする牧畜民「ボロロ」が住んでいた。

キャッサバ畑を見学した後、牧畜民の居住地を訪れた。彼らはここに来て 5 年ほどということで、彼ら自身もキャッサバを少量ながら育てていた。同じ村にありながら、先に見た場所とこれほどまでに違う景観、暮らしぶりに大変驚いた。



写真 1：キャッサバの加工の様子（カメルーン・アンドン村）

キャッサバの栽培プロジェクトは今後数年間続く。同じ村にありながら、農耕と牧畜といった生業の違いでそれぞれの人々が得られる恩恵の度合いが異なってくるのは明らかである。こうしたプロジェクトが農耕民、牧畜民、その他立場の異なるアクターやその相互関係に影響を与えるのは必至だ。今回、こうした生の現場を見ることで、地域研究を続けながらそうしたことに自分がどう関わっていくのかを改めて考えさせられた。この問題に対する回答は、一朝一夕に出せるものではない。フィールドを実際に訪れて感じたのは、むしろ地域研究を進めていく中でしかその答えは見つからないだろうということであった。

フィールドスクールで学んだことがどのように研究テーマにいかせるか？



写真2：「ボロロ」の家①（カメルーン・アンドン村）

上記のアンドン村で研究対象としている牧畜民の集落を訪問できたことが収穫である。私の調査地とアンドン村は、社会的な背景がかなり異なっている。その違いとして、アンドン村は王国の支配下にはないことと、農耕民が多数いる村であることがあげられる。

アンドン村において牧畜民は農耕民とは、いかに関係を築き、定住したのだろうか。また、村に入っているプロジェクトとどう関わっていくのだろうか等、様々な疑問がわいた。このようなトピックは、自身の研究ではあまり取り上げることのないものである。今回、村落内の見学が極めて短時間だったのは残念であったが、今後もアンドン村の動向に目を向けることで、自身が調査している地域を理解するヒントが得られるだろうと考えている。



写真3：「ボロロ」の家②（カメルーン北部）



写真④：調査地にて新しく建設中の家。調査地の家は土づくりである。（カメルーン北部）

参考文献

- 嶋田義仁、2008、「ボロロ 西アフリカ最後の遊牧民」、福井勝義・竹沢尚一郎・宮脇幸生編、『講座 世界の先住民 ファースト・ピープルズの現在 05 サハラ以南アフリカ』、明石書店、pp. 362-380.
- Michaela, Pelican. 2009. Complexities of indigeneity and antochthony: An African example. *American Ethnologist*. 36(1):52-65.